



執着心



カワズ

「読み終わったあと死にたくなるよ」。太宰治の人間失格の本を買ったとき、友人からそう告げられた。どうやら友人はその本をもう読んだらしい(というか、どうやら頭のいい学校では授業で純文学を学ぶらしい)のだが、「オススメはしない」と言われた。ただただ暗いだけで、読み終わったあと死にたくなる。どういうことだと思った。それほどの、誰かの人生にピリオドを打つほどの影響力を持った小説なのか！私はなんだかドキドキした。

しかし読みはじめて得たものは強い共感だ。鏡を見ているような感覚、この人は私と似ているという薄い恐怖感。調べてみると太宰も私と同じ六月生まれなのだを知った。私は昔から自分の誕生日にこだわる所があり、また自分が「この人のことが好きだ」と思う人は大体みんな六月生まれだった。そういう変な勘があるせいだろうか、私は自分と同じ誕生日の人物とよく出会う。これもまた、薄い恐怖感が湧いてくるものだ。

さて、人間失格の恐ろしいところは私に暗い塊を落としたところである。黒い影響を与えられた。そのせいで、黒い影響を与えられたせいで、私は生きることにひどく執着するようになった。死にたい死にたい死にたいと呟き、けれどこのうのうと生きている。大多数の人間がそうであるように、私も絶望ごっこが得意になった。ひどい話だ。

人に優しくして、嫌われたくなくて、でも人と関わることは得意じゃなくて、なのにニコニコと笑顔で人に接して。そういう人間が自分以外にいることに安堵したのは、まあ、事実だが。あの人もこの人も自分よりかは器用に生きているだろうと思う私にとって、この本はなんというか、本当に、暗い塊だった。「大丈夫だよ」と「調子にのるんじゃないよ」の言葉を、同時に叩きつけられたとでもいうのだろうか。そんな人間は私だけじゃないという安堵感と、私は特別な人間じゃないという喪失感。それを、教えられた。

けれど私はこの一冊に出会ったことにより更に太宰を求めるようになった。もっと、もっと、彼の文章を。なんせ中毒性の高い文章だと思う。ずっと読んでいたくなるというか、彼の世界で生きたくなるのだ。そう、生きたくなる。私はこの本を読んで死にたくなどならなかった。死への執着が強い分、生きることに執着していると感じた。暗い黒い部屋に居る方が、差し込んできた光に敏感になる。そういうことだ。

だから私は今日も死にたい死にたいと呟きながら、こうしてパソコンのキーボードを打っている。これだって生きるために必要な作業だ。なにか文を紡ぐことで、どうにか私は私でいられる。太宰よ、あなたも或いはそうだったではないかしら。文を紡ぐことで、どうにか命を。私が死んだらあの世で太宰にそう質問してみよう。それまでは私もまだ、生きる。